

信州大学人文学部東洋史分野紹介

(2019年3月増補改訂)

目次

東洋史分野の教育目標.....	2
東洋史分野の射程.....	2
東洋史分野のカリキュラム構成.....	3
A) 講義受講の際の注意.....	3
B) 演習で行うこと.....	3
C) 授業外での作業.....	3
D) 卒業論文執筆.....	4
東洋史分野への進級を考える方へ.....	5
語学について.....	5
東洋史分野に向いている方、向いていない方.....	5
留学について.....	6
隣接分野との協同・差異.....	6
見学の機会.....	7
進級志望調査票の書き方（東洋史分野の場合）.....	7
進級受入要件.....	8
卒業論文のテーマ.....	8
卒業後の進路.....	9
担当教員.....	9

東洋史分野の教育目標

東洋史分野では、おもにアジア地域の、あるいはアジア地域にかかわる歴史的事象について、従来の学術的な研究成果を駆使するとともに、多種多様な言語・材質からなる史料をみずから探し出して、科学的・実証的な観点から分析を加えることのできる人を育成することを目的としています。このプロセスを経て、現代社会を生きるうえで必須の情報分析・処理能力をかたちづくられることが期待されます。

東洋史学を学ぶことは、第一義には、アジア地域の過去と現在を知ることです。しかし、学問的な訓練を受ける中で習得される技能は、過去だけではなく、いまそこにある現実を読み解くためにも使われるべきです。歴史学は単に過去の事実を明らかにするだけのものではありません。東洋史分野での経験を通じて、現実を冷静に見据え、賢く生きる術が身につけられることでしょう。

東洋史分野の射程

「東洋史」と聞くと、漢籍を紐解き、中国史の研究をしているものと思われるかもしれませんが（グーグル画像検索をするとそんな感じです）。たしかに、中国「前近代」史研究は東洋史学の中の重要な構成要素のひとつです。また、漢籍がカバーする範囲は中国史のそれなりの割合を占めます。しかし、「近現代」の中国史を研究するには、漢籍だけでは到底足りず、多種多様な形態、言語を用いて当事者が残した様々な記録や統計なども利用していかねばなりませんし、そもそも中国以外の地域、朝鮮半島や台湾、東南アジアなどを研究するには実は漢籍も必要だったりしますが、主軸が現地の言語や、あるいは英語・フランス語・オランダ語・ポルトガル語・スペイン語・日本語など多様な言語で書かれた史料になることは言うまでもありません。

日本の東洋史学は、国史（日本）・西洋史（ヨーロッパ・アメリカ）以外のほとんどの部分をカバーする、きわめて広範な射程と深みを持った学問分野です。決して「中国史の言い換え」ではありませんし、ましてや「前近代中国史の言い換え」などではありません。

東洋史学という学問領域のなかには、おおむね東アジア・北東アジア・中央アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの地理区分があり、それぞれの地域の歴史的展開についての研究が行われています。そして、その連環も決して忘れてはなりません。本学東洋史分野のホームページの写真は、ちっとも中国っぽさがないかもしれませんが、中華人民共和国福建省の古い港町泉州（マルコ・ポーロ『東方見聞録』ではザイトン Zaiton として登場します）にある、イスラム教の礼拝堂（モスク）です（2006年撮影）。そこには1000年以上におよぶ中国史・漢籍だけではカバーしきれない交易・文化交流・社会の中の衝突と受容の歴史があります。背景の広さ・多様性をつながりを意識することが東洋史学の醍醐味でもあります。

なお、本学人文学部の東洋史分野では、おおむね学生の希望に沿って、現代から古代まで幅広い研究テーマの設定が可能です。よく「××はできますか？」みたいな質問を受けますが、だいたい「(本人の努力次第で)できる」とお答えしています（ただし考古学や社会調査

はチーム組んで発掘調査に行かないとダメなので、ウチでは無理です)。とはいえ正確には、「始めるのは全然かまわないし、邪魔も絶対しないつもりだが、うまくいくかはやってみないとわからん」といったほうがいいかもしれません。なべて研究とはそういうものですから。ダメなときのリカバリの仕方は教えます。

東洋史分野のカリキュラム構成

東洋史分野には、必ずしもかっちりしたカリキュラム構成はありません。これは、東洋史分野がカバーするフィールドが広大かつ多様であることによります(例えば“日本軍占領下の香港”と、“唐と中央アジア”といったテーマを勉強するときに、同じステップを踏むとは普通思えないですよ)。研究を進めるうえで、念頭に置かれる地域・時代によって習得すべき知識・技能も極めて多様なものになります。ただし2年次、3年次にそれぞれ達成しておいてほしい段階というのはありますし、卒論作成に際してほしいこれくらいで、というプロセスもあります。

以下、具体的な演習の授業の内容と、それ以外にしてもらう作業について述べます。

A) 講義受講の際の注意

東洋史概論が必修ですが、日本史概論と西洋史概論もあわせて6単位(3コマ)必要です。要するに歴史学コースの概論は全部出ておけ、ということです。特論は、なに史特論でもいいのでたくさん出て勉強してください。ほかにも、もちろんいろいろ単位をちゃんと取ってもらいますが、基本的に4年次に上がる段階で取り残しはない状態にしてもらいます。4年の後期に「卒論書いたんですけど、あと4単位残ってて～」などと言われると教員はとても心配します。

B) 演習で行うこと

2年次では、基幹演習を通じて、専門的な辞書など工具書を利用しながら、外国語、日本語の史料を読む基本的な作法を習得することが望まれます。とにかくこまめに専門的な辞書を引くこと、自分の浅はかな知識や根拠のないイメージに頼らずに史料に向き合うこと。これらを意識できるようになることが目標です。

3年次では、発展演習を通じて専門書・学術論文などについての批判的な扱い方を習得します。専門的な研究の基盤となる一般的な知識を把握しつつ、専門書・学術論文の内容について、鵜呑みにすることなく、内容を吟味し、同時に、その業績をこれまでの研究のながれのなかに位置付けられるようになることが目標です。

C) 授業外での作業

2019年度から、以下のプロセスを運用します。

★関心文献リスト

関心のある文献（論文や著作）をひたすらリストアップしていくものです。形式は以下の通りです。

論文の場合：著者名「論文名」（『収録雑誌名』号数、出版年）

著作の場合：著者名『書名』（出版社名、出版年）

これを著者名 50 音順で、ひたすら並べていきます。読まなくても、あるいは入手できなくても構いません。とにかくリストを作っていきます。自分で何に関心があるのか、簡単に把握する事ができます。また、長大なリストが出来るとすごく勉強した気になります。このリストをもとに、「これとこれが手に入らないんだけど」と教員に相談していただくと、だいたいすぐ調達できます。教員はそういうのを調達するのが仕事です。

★読書メモ

実際に手にとった論文や著作を読んだ記録です。作成方法は以下の通りです。手書きのノートでも構いませんが、再利用や検索の便を考えると、PCで作ったほうがよいでしょう。

①目次を入力・筆写する（コピペはしない）

②項目ごとに、簡潔に内容を書き込む。

こちらは読んだもののリスト・内容が蓄積されます。他分野の授業などのレポートで使った本も入れてください。（「勉強した気になったか」、ではなく）何を勉強してきたのかが一目瞭然です。8月除く、偶数月末にメール添付で提出してください。誰かにメールしておけばそれがバックアップにもなります。

★研究史概略執筆

3年次 1-3月には、そこまで検討対象としてきた地域・時期についての研究史の概略を書いてもらうことにしています。つまり3年次終了までに、研究者たちが何を問題とし、どのような史料を用いて、何を明らかにしてきたのか、概略を把握して説明できるようになってもらう、ということです。前述の発展演習での報告や読書メモの作成を通じて論文・著作は読んでいるはずなので、そんなに手間はかかりません。これをふまえて4年次の卒論執筆が始まります。

D) 卒業論文執筆

4年次には、卒業論文を執筆します。自分の関心と社会の状況、先行研究の到達点などを勘案しながら、テーマを選び、調査・分析を行い、論文をまとめます。自ら学術的な営みを体験することにより、具体的な歴史的事情への造詣を深めるのみならず、社会における様々な問題解決に学術的なリソースを用いることが出来るようになることを目的とします。

具体的な執筆プロセスは以下の通りです。4月に前年度末までにまとめた研究史をふまえて題目届を出します。この題目は、論文の具体的なタイトルというよりテーマ設定というべきものになるでしょう（この題目は提出まで変えられません）。題目届を考えながら、自分は

何が明らかにし、指摘できるのかを考えます。4年次前半は就職活動や公務員試験などで落ち着かないでしょうから、その間は関連する論文・著作を読み、暇を見つけて史料を集めてもらいます。(松本が)涼しくなる頃にはいろいろ落ち着いてくるでしょうから、史料を読みつつ、9月末を目処に、取り上げる地域・時期の概略を書いてもらいます。これから分析する内容について、全体のなかの位置づけを意識するためです。そのうえで、集めた史料を読んで、何が書いてあるのか、何が分かるのか、分析を加えて、実証を積み重ねていきます。これらの実証をふまえて、ある一定の歴史的に意義のある事実を明らかにし、その位置づけ、意義を考えながら、本文を執筆していきます。

これらの作業を通じて、歴史的な思考(ある事柄についての研究蓄積を収集・整理し、概略を把握した上で、研究上の課題の存在を指摘し、その課題を解決すべく、史料を読み直し、新しい実証・分析を行い、一定の主張を行う)が身につくことと思います。同時に、取り上げた時期・地域のある事柄に関するエキスパートになることが期待されます。

東洋史分野への進級を考える方へ

語学について

東洋史分野は、日本以外の地域について研究する分野なので、必然的にその地域の言語を利用する必要があります。日本の中等教育まででは触れることのない言語、本学では初修外国語として開講されていない言語が多くあります。それぞれの言語の習得方法については、適宜指導を行います。これまでに勉強していなくても構いません。ただし、教えるのは「習得方法」であって、言語そのものではありません。語学は自分で勉強してもらいます。

東洋史分野に向いている方、向いていない方

東洋史分野では、1年次に特定の授業(東洋史概論など)の受講していることなどを受入れの条件とはしていません(東洋史に限らず、歴史学コースの概論はとっといたほうがあとが楽ではありますが)。また、上述の事情があるので、特定の語学(例えば中国語、ハンダ語など)についての学習経験も求めません。ただし、英語以外の外国語を勉強するつもりのない方、日本以外の地域に関心のない方はやめておいたほうがよいでしょう。べつに流暢に外国語を話せるようになることを望んでいるわけではありませんが、3年も在籍して自分が研究した地域の言語の辞書も引けないようでは話になりません。

なお、選んだテーマ・地域にかかわる言語は、自修が基本です。勉強する手がかりについては指導しますし、教員が逐次相談にのります。

東洋史分野は、基本的に、一人に一つの専門を設定することを求めます。教員はヒントや、地雷の存在について示唆はしますが、**自分の研究は自分です**のです。そのため、同じ分野でもだれかと一緒に同じ史料・文献を調査・分析することはあまりありません。東洋史資料室で本を読んでいる学生をよく見かけますが、かれらは一緒にいて、談笑しながら

ら本を読んでいても、その本の内容はそれぞれで、みな違うものを勝手に読んでいます。共同作業にこそ喜びを覚えるようなタイプの方は止めておいた方がよいかもしれません（資料室の管理・運営などには協力していただないと困りますが）。

なお、東洋史分野ではイベントごとはあんまりやりません。ざっとあげると、

4月下旬：進級者歓迎の宴

7月末：2年生面談

9月下旬：東洋文庫（文京区）・アジア経済研究所図書館（千葉市）見学日帰り現地集合
現地解散ツアー

11月下旬：信大史学会

1月前半：進級面接

2月初旬：卒論口頭試問／卒論通過祝賀の宴

くらいです（思ったよりあるな・・・）。合宿形式のゼミなどはありません。海外調査もありません。

留学について

めっちゃ応援します。機会（と経済的な余裕）があれば、ぜひ行ってください。分野でカバーできる部分については最大限配慮します。

隣接分野との協同・差異

東洋史学は、ヨーロッパ・日本・南北アメリカ以外すべてをカバーする学問領域です。そのため、多くの学問分野と重なる部分があります。

例えば、日本史分野とは、古代から現代に至る日中関係・日朝関係など日本の対外関係については、重なる部分があります。この場合、どちらに軸足を置いて考えたいのかが重要になります。外国と日本の両者の思惑や、外国からみた日本について考えるなら、東洋史分野のほうがよいし、日本の立場を考えるなら日本史分野のほうがいいかもしれません。

西洋史分野とも、たとえば、アフリカ、インドや東南アジアでの欧米諸国による植民地統治などをめぐって研究が重なります。東アジア・中央アジアなどでの西ヨーロッパの人々の活動なども重なる部分です。実際、東洋史学の研究者は、ヨーロッパの文書館にも頻繁に出かけます（自分のフィールドよりも、むしろ世界各地の情報が集まるたとえばロンドンの国立文書館のほうが同業者によく遭遇するのです）。ヨーロッパの中で完結することは西洋史分野のほうがよいでしょうが、グレーゾーンになりそうなところ（例えば、オスマン帝国やロシア帝国は伝統的にヨーロッパの国際関係に含まれていますがアジアっぽさが濃厚な政権です。西アジアは東洋史・西洋史どちらでも取り扱います）についてどちらで勉強するかは、好みの問題です。歴史学コースの各分野の必要習得単位は重複していますので、どの分野でも取る授業はあまり変わらないともいえます。周りで一緒に勉強する仲間とどのような話をしたいのかを考えながら選ぶと良いかもしれません（といっても、東洋史分野のメンツのなかでもやってる内容がかぶることは

あんまりなかったりもしますが)。

欧州言語の語学・文学分野とも、例えば植民地における文学などにおいて、重なる場合があります。たとえば、20世紀前半の上海やハノイについて語られた文学作品で、英語やドイツ語、フランス語、日本語などで書かれている場合、東洋史学のみならず、比較文学・英語文学・ドイツ文学、フランス文学、日本文学にも関わるというのは、ご理解いただけるだろうとおもいます。これを言い出すと、芸術コミュニケーション分野とも関係がある、ということになります。

中国語学・文学分野や哲学思想分野とも、中国という部分で重なる部分が大いにあります。東洋史学は、社会経済史・政治史を中心とした学問分野です。人間ひとりひとりの考えや文化的事象よりも、社会構造や政治構造などへの関心が強い分野です。また、よその地域との連関を強く意識するものです。人々の暮らしなど社会状況などは、東洋史分野で扱われます。著作を残すような人物の思想は哲学思想分野（中国哲学）、文学作品の内容や言語学的な分析は中国語学・文学分野で扱われます。あと、「中国人とはどのようなひとびとなのか」「何を考えているのか」といったことも、どちらかといえば中国語学・文学分野の守備範囲でしょう。東洋史だと「中国政治・経済はどのような構造をもっているのか?」という事を扱います。細かいところは教員にお尋ねください。

見学の機会

研究室・資料室訪問の日程をご確認ください。ただ東洋史分野では、東洋史資料室（人文棟3階）見学を常時受け付けています。とはいえ、突然おいでいただいても正直困る（誰もいないかもしれない／卒業論文執筆・ゼミ報告準備などで修羅場まっただなかの怖い顔した学生がいるかもしれない）ので、希望者は事前に教員（豊岡：連絡先は担当科目のシラバスなどで確認してください）にメールで、あるいは担当の授業前後などにご相談ください。

進級志望調査票の書き方（東洋史分野の場合）

進級志望調査票は何を書いたらいいかわからないとお思いの一年生が多いと思います。そこでこういう事を書いておいてくれると（東洋史分野の担当的に）助かるという事を書いておきます。なお当たり前ですが、書いてある文章が支離滅裂だともうこうもありません。他所の分野はよくわかりませんし、先生方にはそれぞれお考えがあるので、直接聞いてみたら良いかもしれません。

- ① 関心のある地域・時代（あんまりざっくりでは困る/複数可）
- ② なぜその地域・時代に関心を持ったか（とくに真面目な理由でなくて構いません/複数可）
- ③ 何語の史料を利用してみたいか（具体的に/複数可）

ここでこういう事を書くのもおかしな話ですが、興味関心は変わります。むしろ変わらないのは成長がない、とみなすべきかもしれません。なので、あんまり遠慮したりせず、その時の興味関心をズバッと書いてください。

進級受入要件

指定の共通教育の単位数（23/専門科目はノーカウントです。細かくは学生便覧を見てください）が取れる見込みがあることはもちろんですが、これに加えて、秋に行われる資料室訪問に参加していること（指定の日時に資料室を見にきてね、というだけです）、東洋史概論Ⅰ・東洋史概論Ⅱ・共通教育の東洋史分野教員担当授業（名前が変わる事があるのでシラバスをよく見てください。2019年度は「モノの世界史」）のいずれかを受講していることの2点を条件とします。あと、この説明文を読んでも条件にしていますが、ここに書いても仕方ないですね。

教員の能力と資料室の容量を鑑みて毎年の受入人数上限は「7」とします。そのため相対評価にならざるを得ません。あしからずご了承ください。なお GPA による足切りなどはしません。前期分の GPA だけ見てもあまり意味がないからです（東洋史分野教員担当授業のコメントペーパーや試験の答案などががちり見ます）。

志望調査表や面接では向き不向きを見ていますので、受入上限に達していなくても他分野での話を聞くようお話することもあります。その関心だとうちの分野ではあまりハッピーではなかろう、ということですので、ご了解ください。あと、後悔が残るといけないのでいくつかの分野の話を聞いてきなさい、というふうに言う場合もあります。並べて進級面接は選抜ではなく、マッチングだと考えていますので、迷いがあれば迷いがあるとはっきりお申し出ください。

卒業論文のテーマ

近年のテーマは以下の通りです。

「人民共和国成立期の中ソ関係」（2011 年度）

「上海における西洋文化の受容と変容」（2013 年度）

「中国の革命運動における資金調達：金銭的なやりとりから見る辛亥革命」（2014 年度）

「日韓の歴史認識をめぐって：日韓歴史教科書研究交流の視点から」（2015 年度）

「満州国をめぐる国際関係」（2015 年度）

「現代インド社会と経済発展」（2015 年度）

「日中戦争期の通貨と金融：日本の偽札工作について」（2015 年度）

「明代江南における地域社会：地方志から見る社会秩序変化の考察」（2016 年度）

「中国における近代国家の形成と女性：清末の女性教育について」（2016 年度）

「現代中国の計画出産」（2016 年度）

「中国国民政府期の教育政策：日中戦争期における教育方針と学生の救済」（2016 年度）

「旧日本軍兵士の男性性：軍教育と性意識からみる日中戦争期の性暴力」（2016 年度）

「戦後韓国の経済発展における農村社会：農地問題・食糧問題を中心に」（2016 年度）

「中国共産党の図像プロパガンダ：宣伝画の民衆への浸透と様式・特徴の変遷」(2017年度)

「在日朝鮮人運動と生活困窮問題：生活保護、帰国事業のなかの祖国防衛」(2017年度)

「マレーシアにおける近代的教育制度と宗教」(2017年度)

「漢代の文書行政：文書の伝達を中心に」(2017年度)

「台湾総督府の衛生事業：衛生事業に協力した台湾住民」(2017年度)

「アメリカ統治期フィリピンのムスリム」(2018年度)

「裁判からみる清代の宗族」(2018年度)

「香港と移民問題」(2018年度)

「20世紀オスマン帝国における非ムスリム」(2018年度)

「イギリスの「グレートゲーム」認識」(2018年度)

「フランスにおけるシオニズム形成」(2018年度)

「英領マラヤの移民管理制度」(2018年度)

卒業後の進路

特別な仕事に就く例はあまりありません。近年は公務員が多く、一般企業（業種も様々）が続きます。教職免許（社会・地理歴史・公民）を取得する学生はそれなりにいますが、そのまま教員になった例は多くありません。

大学院進学を希望する学生ももちろん受け付けますが、相応の指導をします（キツイのか、ユルいのかは受け手の感覚次第ですが）。適宜ご相談ください。

担当教員

豊岡康史(TOYOOKA Yasufumi)。1980年生。博士（文学/東京大学大学院人文社会系研究科、2010年）。

専門は清朝18・19世紀史、特に政治史、経済史、グローバルヒストリー。既刊論文・書籍はSOAR参照（名前をGoogleなどで検索すると2番めくらいに出ます）。

よく使う図書館は、故宮博物院圖書文獻館（台北）、中央研究院歴史語言研究所（台北）、中国第一歴史档案館（北京）、英国図書館（ロンドン）、英国公文書館（キュー）、澳門歴史檔案館（マカオ）。